

## 酒田市立資料館 第226回企画展 絵と写真に残る 庄内の農耕風景

開催期間 令和4年 6月25日(土)～9月5日(月)

### 開催にあたって

日本人の生活が大きく変わった戦後の高度経済成長期は、稲作の機械化が進んだ時代でもあります。トラクターやバインダー、コンバインなどの農業用機械の導入が進むにつれ、田を耕し、刈り取った稲やたい肥を運んだ馬や牛は次第に姿を消していきました。手作業でひとつひとつ苗を植える田植えは珍しくなり、庄内平野の稲作風景は大きく変わりました。

資料館では、まだ人の手による田植えや稲刈りが行われていた昭和30～50年代に撮影した写真フィルムや、地元の人たちが思い出を振り返り、温かい筆遣いで農作業風景を描いた絵などを収蔵しています。この中から、生き生きと働く人々の様子や、農家の嫁入りなど、昔懐かしい農村の風景を紹介します。

江戸時代後期から明治時代に、庄内の絵師が当時の農耕風景を描いた2つの「四季農耕図」も併せて展示します。

庄内の風景でまず思い浮かぶのは、整然とした田んぼが広がる庄内平野ではないでしょうか。下の写真は酒田市観光物産課(当時)が撮影したフィルムをプリントしたものです。稲刈りを終えた田んぼに、稲を乾燥させるための「杭掛け」がどこまでも続いています。写真の中央には、作業中の人たちも写っています。

庄内では明治20年代半ば以降に湿田の乾田化が進み、明治24年(1891)には福岡県から馬耕教師が招かれました。乾田馬耕が普及し始めると、作業の効率化のために耕地整理が進められ、一反歩区画の田んぼの形が整えられました。

昭和30年代に機械化が進む以前は、稲作は馬や牛の力を借りながら、大勢の人が協力して手作業で行っていました。現代の稲作に比べれば苦労は多かったでしょうが、今回展示している絵や写真からは生き生きとした空気が伝わってくるように思います。地元の人たちが残した絵や写真は、一つの作品であると同時に、うつり変わる故郷の風景を伝える大切な記録です。



稲の杭掛けがどこまでも続く庄内平野  
昭和40年代以降に撮影

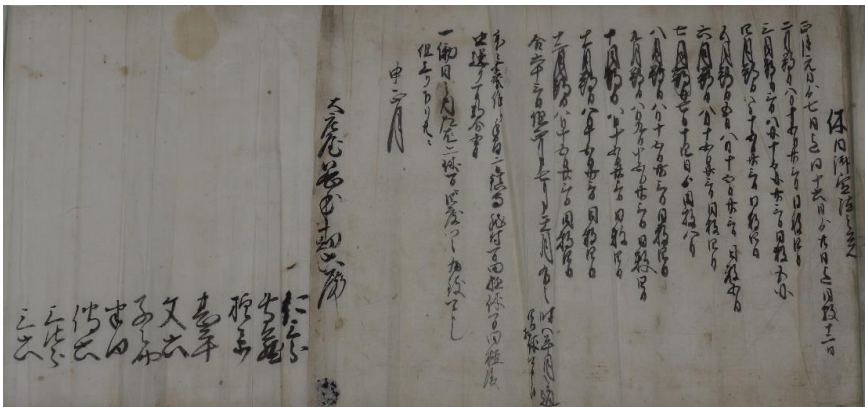
「飽海郡耕地整理組合絵はがき「飽海郡耕地整理組合開田」 大正2年(1913)



明治43年(1910)、本間家が中心となって「飽海郡耕地整理組合」が結成されました。約22年をかけて、現在見られるような整然とした田んぼの形を整え、灌漑排水を整備して、昭和6年(1931)に事業を完了しました。

この写真は、大正2年(1913)に発行された絵はがきのなかの1枚です。整備が済んだ田んぼの畦道に組合の関係者と思われる人たちが並び、稲の杭掛け作業の様子を見えています。作業をしている片方の人にはハンコタンナを着けているように見えます。

「休日御定之覚」(佐藤文吾家資料) 天明8年(1788)



天明年間(1781～89)に平田郷漆曾根組北境村の長人百姓(村役人)を勤めた佐藤文吾家が持っていた、農民の休日についての記録です。

天明8年(1788)、仁三郎ほか9名から大庄屋へ差し出されたもので、月ごとに農民の休日を定めています。田植え休みや「虫送り」(害虫を追い払うための民俗行事)の日数なども定めています。

江戸時代の農民は「五人組」という連帯責任を負っており、休日の日数を含め日常生活が厳しく制限されていました。

今回の企画展では、江戸時代後期から明治時代初期の稲作の様子を描いた「四季農耕図」を展示しています。絵の中の農民たちは、笑顔で和やかに農作業にいそしんでいますが、現実には私たちには想像もできない労苦が多かったことでしょう。

## 庄内の絵師が描いた四季農耕図①

いちほらえんたん  
市原円潭筆 「四季農耕図屏風」



(右隻)



(左隻)

市原円潭(文化14年/1817～明治34年/1901)は酒田天正寺町生れの画僧です。京都や奈良で古仏画を模写するとともに、冷泉為恭に学び、独自の画風を確立しました。仏画や人物画、山水図を描いています。

この絵は、米作りの一年間の主な作業を六曲一双に描いた作品です。右隻では、向かって右側から季節が春から夏へ移り変わり、田起こし、種籾を撒く様子、田植え、稲が伸びた夏の田んぼが描かれています。左隻では秋から冬の作業が描かれ、脱穀調整と倉入れの様子が描かれています。

## 庄内の絵師が描いた四季農耕図②

おおふちぶんけい  
大淵文溪筆「四季農耕図」



大淵文溪(?～明治30年/1897)は旧庄内藩士です。『庄内人名辞典』によると、庄内の絵師・林文匡はやしぶんきょうに絵を学び、のちに鶴岡公園地曙亭の六角堂に住んで絵を描きました。

この農耕図は6幅1組で、市原円潭の「四季農耕図屏風」よりも、細かく具体的に稲作の1年間の作業を描いています。何かから切り取った状態で寄贈を受けた作品のため、もとの形状は分からず、破損箇所も多くありますが、生き生きとした農民の表情やしぐさは、なかなか見ごたえがあります。

## 鶺鴒渡川原村の農耕風景 五十嵐豊作氏画

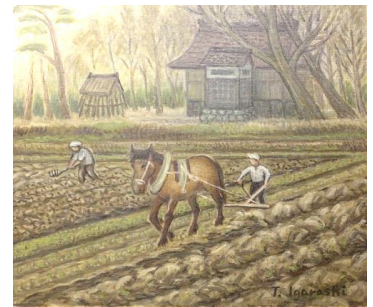
①



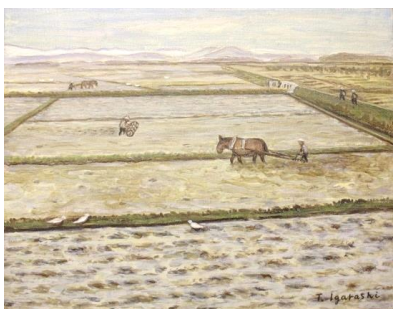
②



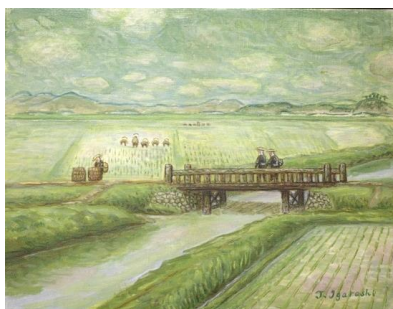
③



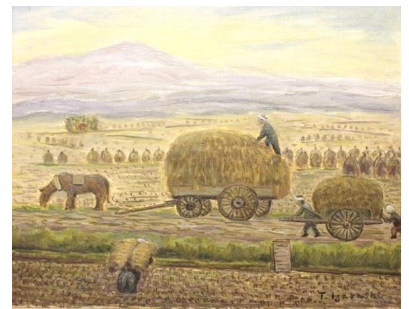
④



⑤



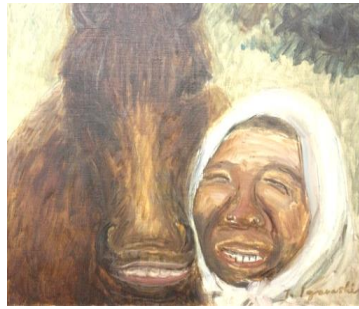
⑥



⑦



⑧



⑨



五十嵐豊作氏は、大正6年(1917)に<sup>うどがわら</sup>鵜渡川原村(現酒田市亀ヶ崎)に生まれ、山形県立酒田工業高等学校(現酒田光陵高校)などの教師を勤めました。退職後、『亀ヶ崎史』編纂の際に依頼を受けたのをきっかけに、故郷の風景画の制作を始めました。平成9年(1997)4月、描きためた作品160点を掲載する『追憶の鵜渡川原画集』を出版し、平成13年(2001)に85歳で亡くなりました。

現在、画集に掲載された作品のうち157点を資料館で寄贈を受け、所蔵しています。

思い出の風景を振り返り、色鮮やかに柔らかな筆遣いで描いた絵は、見る人を温かい気持ちにさせてくれます。その中から、機械化する以前の稲作の様子を描いた絵を選んで展示しています。作品の解説文は、画集から引用しています。

### ①馬そりで堆肥を運ぶ

遠くの山は月山。手前の村は大宮。

### ②西川原(千石町)の田んぼで堆肥を散らす

4月、馬車の付近が市立病院。堤防の上に山居の松林が見える。

### ③荒くり

5月。白く見える逆水門の近くで、荒くり仕事をしている。仕事は、馬耕、しき分け、ダラ入れ、水入れ、荒くり、代カキ、型付け、田植え、草取り、ヒエ取り、稲刈りの順序で、米が出来るまで八十八の手数がかかるという。

(※荒くりは田んぼの土と水を混ぜる作業です。)

### ④馬耕

5月。馬は冬季間の運動不足で足が弱っている。仕事に入る前は、獣医の診察と栄養補給が大切。

### ⑤田植の頃の鶴亀橋

5月、鶴亀橋の近くで田植えが始まっている。明治44年(1911)、遊摺部に動力揚水機完成。田んぼに稲の植え付けがはじまったのは、大正2年と聞いている。

### ⑥晴れた日の稲揚げ風景

### ⑦ニオづくり

稲蔵に入りきれない稲束や藁束を農家の裏庭に積んで、ニオを作っている。ニオは、強風や風雪に耐えるように工夫して積まれている。

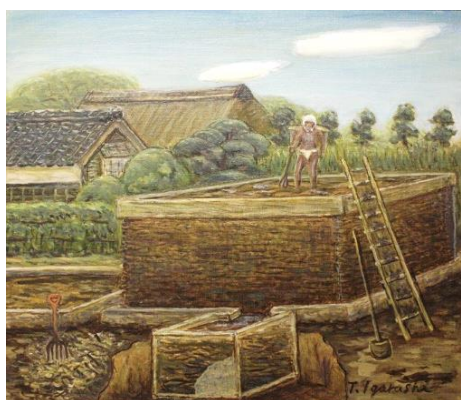
### ⑧愛馬とダダチャ

明治30年(1897)頃、村に乾田馬耕が普及し、農耕馬は年々増加して、昭和26年(1951)、111頭を数えた。昭和30年(1955)、耕運機の導入が始まり、馬数は激減した。いよいよ、ダダチャと愛馬の分かれがやってくる。

### ⑨農作業着

- ①ハンコタンナ ②若向き女性用笠 ③中年向き笠 ④半袖じゅばん ⑤うでさし
- ⑥手子(手甲) ⑦半丁猿ばかま ⑧脚半 ⑨ハンコタンナ ⑩草取り用目の保護網
- ⑪うでさし ⑫女性用前掛け ⑬あしだか ⑭男子用すげ笠 ⑮手じまシャツ
- ⑯ズボン、またはモンペ ⑰ぶわり、または夜着=防寒用(家で休むとき着用)
- ⑱じんばん=防寒用 ⑲ズックめんだれ

(解説は五十嵐豊著作『追憶の鶴渡川原原画集』より引用)



五十嵐豊作画「堆肥作り(コエジカ)」

### —農家が「肥塚」で作っていた堆肥(たいひ)—

化学肥料が普及するまで、稲作には農家で作っていた堆肥を肥料にしていました。

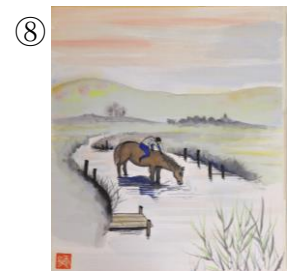
堆肥は、家の近くにワラや刈草、野菜くずなどを集めて発酵させて作りました。五十嵐豊作氏の「堆肥作り(コエジカ)」という絵には、「土台にワラ束を敷き、馬舎の敷ワラや糞尿、肥草などを積み上げて、汚水を掛けながら発酵させ、8月と12月に積み替える。昔は、優良堆肥作りを奨励指導して、賞を与えたこともあった」と説明文が付いています。

積み上げた堆肥を肥塚<sup>コエジカ</sup>といいます。地域によってコヅケなどとも呼ばれていました。

### 『絵姿 酒田・鶴岡いまむかし』より

昭和59年(1984)に出版された『絵姿 酒田・鶴岡いまむかし』(斎藤一郎著)には、著者が子供だった大正末期から昭和初期にかけての暮らしを、情感豊かに描いた絵が多数収められています。そのうちの、稲作風景を描いた原画です。





①<sup>こえ</sup>肥ひき

粉雪舞う冬の朝、肥塚<sup>こえづか</sup>から田んぼに運ぶ馬そりでの肥ひきは、もう見られない。横すべりしながら、湯気を立てて通る。

②株沈め

飽海地方では、株切りともいうが、苗代で「おあし」という大きな下駄のような箱をはいて、水をはった苗代をならす。

③型付け

ゴロゴロところがして田植えの型をつける。この作業は「<sup>くわがしら</sup>鋤頭」といって一人前の農作業での頭株となる。

④肥ちらし

「もっこたがき」ともいう。冬に馬そりで運んだ堆肥を、もっこで田んぼに運び、春先にまきちらす。ふきのとう(バンケ)がもう芽を出すころである。

⑤田植え

腰に苗かごをつけて田植えをする乙女たち。バナナかごも大切な苗運び道具だった。ヒバリが高く鳴くのもこのころだったか。

⑥やせ馬

背負い道具のひとつで、女でも六十キロぐらいのものは楽々と背負えた。やせた馬ぐらいは運べるという意味でつけられた名前だろうか。

⑦馬耕

馬か牛が何よりの動力源で、今の耕運機とトラックとトラクターを合わせたぐらいの働き者だった。もの言わぬ働き者を、農家では家族の一員として大切に飼育していた。

⑧馬冷やし

どの村にも河渡<sup>こうど</sup>があつて、一日の労働に疲れた馬を洗ったり、足を冷やしてやった。馬も河渡には喜んで入ったものだった。

遠い村々が夕陽に美しく映えるころ、歌声が聞こえてきそうな風景である。

(解説は斎藤一郎著『絵姿 酒田・鶴岡いまむかし』より引用)

## 酒田のアマチュアカメラ界をけん引 杉山勇治郎氏が写した庄内の農村風景

杉山勇治郎氏は、戦後の酒田のアマチュアカメラ界の草分け的な存在でした。資料館では昭和54年(1979)に、ご遺族から1,000本を超える杉山氏撮影の写真フィルムを寄贈いただいています。

杉山氏の生没年、経歴に関する記録が残っていなかったため、杉山氏と親交のあったカメラ関係者の方たちにお聞きしたところ、酒田市役所にあった理髪所の仕事をしながら、昭和30年代から50年代のはじめにかけて、精力的に活動していたことが分かりました。

杉山氏は、酒田や庄内各地の風景やまつり、年中行事など、多岐にわたる事柄を撮影しており、農業関係の写真も多く残しています。場所や撮影時期が特定できないものがほとんどで、今後調査が必要ですが、稲作の機械化が進む過渡期の農村の姿を知る資料として、紹介することにしました。

写真に写っている景色に見覚えがある方は、ぜひお知らせください。



### 田植えを終わってみんなで帰る

杉山氏の写真には、一連の作業や行事を順を追って撮影しているものが多くあります。コマ送りのような連続写真もあります。庄内の民俗文化の記録を残そうというほど確固たる目的はなかったかもしれませんが、とても大切な昭和の記録となっています。

この5枚の写真は、田植えを追った写真のうち、作業を終わって引き上げるところです。





### 耕耘機の講習会

女性たちが耕耘機の操作法を学んでいるところです。耕耘機の歯を荷車に付け替えたものに乗っています。場所は、後ろに見える風景から宮野浦だと思われます。こうした珍しい機会にも足を運んでいた杉山氏のフットワークの軽さがうかがえます。



### あさつき 浅葱の収穫

杉山氏は、稲作以外の農作業の写真も撮っています。浅葱と思われる野菜を、堰に並んで洗っている女性たちが写っています。場所は浜中地区だと思われます。

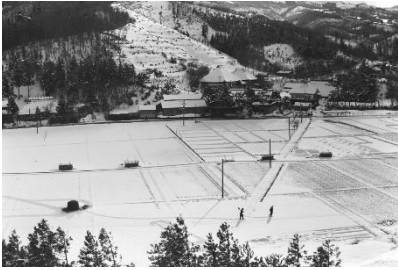


### 雪中運動会(鶴岡市民田地区)

冬の運動会の様子です。踏ふみ俵だわら(雪道を踏み固めるための道具)を使った二人三脚などの競技や参加者たちがフォークダンスを踊る様子を写しています。

稲作風景を写した写真 杉山勇治郎氏撮影 昭和30～40年代

①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫



⑬



⑭



⑮



### ①「肥にお」がある冬の田んぼ

黒い塊が肥におです。ソリを引いて肥におへ堆肥を運ぶ人が写っています。

### ②堆肥ちらし

雪解け後の田んぼに堆肥を撒いています。

### ③軒先に野良着を干している農家

上に展示している「堆肥ちらし」と同じ日に撮ったと思われる写真です。かやぶき屋根の農家の軒先には野良着が干されています。向かって右側には、野良着姿の女性と子どもたちが談笑している様子が写っています。

### ④苗取り作業

水苗代で育てた苗を取って泥を洗い落とし、一握りずつワラでしばっているところです。この女性は子供を背負い、子守りをしながら作業しています。

### ⑤田植え

苗を一束ずつ投げてもらって植えています。苗を投げる人を「コデウヂ(小苗打ち)」と呼びました。飽海地区ではこの方法が一般的でしたが、田川地区では苗を詰めた苗カゴを腰につけて行う田植えが主流でした。

### ⑥型付け枠を使った田植え作業

男性が型付け枠を転がして、田植えのために型付けの作業をしています。その奥では女性が田植え作業を進めています。

### ⑦田植え中の昼休み

田植えは家族だけではなく、共同で何人もの人で行われました。畔で昼ご飯を食べる様子を撮影しているアマチュアカメラマンも写っています。

### ⑧傘で日陰をつくり赤ん坊に授乳する母親

### ⑨昼食のメニューは何？

昼食の内容がよくわかる写真です。ごはん和汁物に、焼き魚などのおかずがそろっています。食器も持参しています。一升瓶の中身はお酒ではなく、やかん代わりに水を入れていたと思われます。昼食の準備の仕方は場所によりますが、ほとんどは各家庭で準備し、お昼時になると田んぼに運んだり、家に戻るのが大変な場合は、朝から畦道に置いたりしたそうです。魚屋から焼き魚を配達してもらうこともあったようです。家に帰って昼休みを取る家もありました。

#### ⑩コデウヂ(小苗打ち)の子ども

畔から苗束を投げるコデウヂ(小苗打ち)は主に子どもたちの仕事でした。田植え、稲刈りの時期は学校も休みになりました。この2枚は連続している写真ではありませんが、一緒に作業をしているところを写したものです。

#### ⑪草取りの様子

稲がだいぶ成長した夏、雑草取りをしている様子です。腰をかがめて作業しているので、「雁爪<sup>がんづめ</sup>」という道具を使っていると思われます。昭和30年代には「除草下駄」が使われるようになり、手押しで使う除草機も開発されました。

#### ⑫稲刈り

広い田んぼを、鎌を使って刈り進めています。

#### ⑬稲の杭掛け

最初は穂が外側になるように掛け、頃合いを見てワラが外側になるように掛け直して乾燥させました。

#### ⑭稲の番をする人形

写真の撮影地は不明ですが、庄内各地には、稲刈りが済んだ田んぼ、もしくは田んぼを一望できる神社などにワラで作った大型の人形を立て、盗難から守るための稲番とする風習がありました。

#### ⑮馬車で稲を運ぶ(稲揚げ)

春の田起こしから収穫まで、馬は農家の大切な働き手でした。



### ハンコタンナ姿の女性

「ハンコタンナ」は、女性が農作業などをするとき顔に覆っていた藍染の帯のことで、日除けや虫除け、泥除け、汗を吸い取るなどの役割があります。庄内地方や秋田県の日本海側などで使われ、秋田県ではハナフクベともいわれています。

もともとは一本の長い帯で、目だけ出して顔全体を覆っていましたが、目の上下に別々に着ける二分式のハンコタンナが登場したことで、装着が楽になりました。

ハンコタンナの装着手順の写真は、昭和30年代後半に撮影されたものです。二分式のものいつ頃から使われていたのかは確認できませんでしたが、この頃は一般的になっていました。

ハンコタンナが使われ始めた時代もはっきりしません。その昔、若い娘がお殿様に気に入られて連れて行かれないように顔を隠したのが始まりという俗説があります。信ぴょう性はともかく、こうした話が伝わっていることから江戸時代にはすでに使われていたと考えることもできますが、今回展示している「四季農耕図」に描かれている女性たちは顔を出しています。演出としてあえて顔を見せたのか、当時はまだ使われていなかったのか、真相はいかに？



～ハンコタンナの着け方～  
昭和30年代後半 酒田市本楯

農村の嫁入り風景 杉山勇治郎氏撮影 撮影時期不明

杉山氏は、農家に嫁いできた花嫁が車から降りるところから、嫁ぎ先の家で祝言を挙げる様子を追いかけて撮影しています。親類の婚礼だったのか、撮影した理由や場所は不明です。撮影年代も特定できませんでしたが、フィルムケースには12月3日とメモがあり、婚礼が農閑期に行われていたことが分かります。

令和の現在、この写真は昔の農村の嫁入りがどんなふうに行われていたのかを知ることができる、貴重な記録写真になっています。

①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



### ①車から降りてきた花嫁

### ②ぬかるんだ道を進む花嫁行列

付き添いの女性とともに、着物を汚さないように慎重に進んでいます。

### ③花嫁行列の前を歩くムゲニショイ(迎え荷背負い)

「嫁だ、嫁だ」という掛け声とともに村の中を回る「ムゲニショイ」の男性。一升瓶を持って、村の人たちにお酒を振る舞っています。

### ④嫁入り道具を運び入れる

荷背負いが自転車や布団を運んでいるところです。

### ⑤両家の顔合わせ

花嫁と花婿両家の親族が集まってあいさつをしているところと思われます。中央に写っている男性は、嫁入りに当たって渡す品物の目録を読み上げているのでしょうか。戸の向こうから近所の人のがのぞいています。

### ⑥三々九度

### ⑦お婆さんにお酒を注ぐ花嫁

長くこの家に暮らしてきたであろうお婆さんへ、花嫁がお酒を注ぎながらあいさつをしている様子です。見たところ別室のようです。お婆さんは後ろから手を支えてもらっています。高齢のため祝言には出席していなかったかもしれません。花嫁は、こうして家の人たち一人一人あいさつをして、迎え入れられたのでしょう。



### ニショイとムゲニショイ

ニショイ(荷背負い)は庄内弁で、嫁入り・婿入りのときに相手方の家までその荷物を背負っていく役目の人のことです。佐藤雪雄著『庄内方言辞典』には、嫁や婿に行く人の親類から2人くらい選ばれ、婚礼当日はある程度無礼講で大いに飲んで祝儀をもらったと書いてあります。

一方、ムゲニショイ(迎え荷背負い)は相手方の親族が務めました。花嫁行列の先頭に立ち「嫁だ、嫁だ」と大きな声で嫁が来たことを触れ歩きながら、祝い酒を振る舞うのがその役目でした。

バケツなど大きな器を準備してきて、もらったお酒は家に持って帰るのが当たり前だったので、お酒はいくらあっても足りなかったといえます。五十嵐氏の絵でも、ムゲニショイではないかもしれませんが、紋付を着た人が樽か鍋のようなものにお酒を注いでいる様子が描かれています。



五十嵐豊作画「嫁取り」

### 花嫁行列は大切な儀礼

上の写真には、車で送られてきた花嫁が嫁ぎ先の家まで歩いていく「花嫁行列」の様子が写っています。

一方、左の五十嵐氏の絵に描かれているのは、花婿の家前で花嫁行列を迎えている様子です。どんぶりや鍋を持って待ち構えていた村人たちは、縄を張って花嫁を足止めして、祝い酒を注いでもらっています。こうして花嫁は村の仲間として認められて、家に入ることができたのだそうです。

現在では家で婚礼を執り行うことが少なくなり、町や村の中を歩く花嫁行列を見かけることはほぼありませんが、昭和の頃まではそれぞれの地域の作法や儀礼にのっとって、花嫁が迎え入れられていました。

### 昔の稲作で使われていた野良着と農機具

①



②



③





④



⑤



⑥



### ①野良着

虫除けや日除けの効果がある、藍染めの農作業着です。

この野良着は、<sup>かすり</sup> 縞模様や細かい縞模様の布を丁寧に縫い合わせて作っています。また全体に紺色の糸で「刺し子」を施し補強しています。刺し子は庄内の作業着の特徴で、布を補強するだけでなく、縫い目を模様として美しく仕上げることもあります。

### ②ばんどり

庄内地方では、農家などで荷物を背負うときに使う背中あてのことを「ばんどり」と呼びます。ワラ製で弾力性があり、荷物に当たる面は補強のために網目や結び目で覆っています。

婚礼で嫁入り道具を運ぶ際には、特別に美しく装飾された「祝いばんどり」と呼ばれるばんどりを使いました。

### ③田植え型付け枠

型付け枠は、明治28年（1895）に遊佐町の篤農家・石川治兵エらによって考案され、普及した道具です。型付け枠を田んぼに転がしてつけた規則正しい線に沿って田植えを行いました。

### ④短柄付雁爪(がんづめ)

稲株の間を除草・中耕するために使った道具です。腰をかがめて這うようにする作業はとても大変で、手押し式除草機の普及後はほとんど使われなくなりました。

### ⑤除草下駄

湿田の除草用具として昭和30～35年ごろまで使用されました。作業者自身の沈下を防ぐとともに、水田雑草を土中に踏み込むことにより除草効果を高めました。

### ⑥手押し式除草機

大正時代に関西方面で使用され、全国に普及したのは昭和初期でした。稲の株の間を通すようにして使われました。